

生き地獄じごくからもどつたわたし！

一 満州まんしゅうに渡るまで

わたしは、大正九（一九二〇）年に滋賀しが県の農家に生まれました。

両親と兄弟に温かく育はぐくまれ、貧ますしいながら平穩へいおんな毎日を過すごしていました。

昭和三（一九二八）年ごろ、東北地方から北陸地方に及およぶ広い範圍はんいに冷害れいがいが続き、農作物の収穫しゅうかくがなく、特に農村では「今日食べる物もない」という悲惨ひさんな生活が続くようになりました。

農村の二、三男は、働きたくても働く場所もなく、耕たがやしたくても耕たがやす土地もない

という状態じょうたいでした。また、働きに出ていた娘たちの製糸工場せいしなどはすべて倒産とうさんして、仕事もなく故郷こきょうにもどつてきていました。

東北や北陸の農村では、そのような男女があふれていました。

このような情勢じょうせいの中、昭和七年、満州国まんしゅうこくが建国されました。

満州国まんしゅうこくは、「王道楽土わおうらくどの建設けんせつ」などと叫さけばれて、多くの若者わかものに夢ゆめを与あたえました。

国くには貧困ひんこんにあえいでいた農村を中心にして、満蒙開拓移民まんもうかいたくいみんの募集ぼしゆを始め、「行け満州まんしゅうへ」「鉄てつをとる兵士へいし」を旗印かぎいんにして、満州まんしゅうへ、満州まんしゅうへと鐘かねや太鼓たいこで送りだすようになったのです。

わたしも時代の波に乗って、まだ見ぬ満州まんしゅうへ夢ゆめをふくらますようになっていき

※満州まんしゅう……71ページの注を参照

※王道楽土わおうらくど……王道とは、儒教で理想とされた政治。王が徳とくをもつて国を治めること。この王道によって治められる平和で安楽な土地

※満蒙開拓移民まんもうかいたくいみん……満州事変後、日本から中国東北部へ送り出された農業移民いかり

ました。

そんな矢先、若い独身の開拓移民の人たちが「夫婦で腰を落ち着けて開拓にはげめる」ようにと、「大陸の花嫁」募集が開始されました。

待ってましたとばかりに、わたしは県の花嫁募集に応募し、六十人の志願者の中から二人選ばれて、その中にわたしが入っていました。

わたしの喜びは、頂点に達していました。

「どうして満州などに行くんだ」

「あまり親を心配させるな」

両親や兄弟たちの思いを、わたしは冷静に聞く耳を持ち合わせていませんでした。それが若さなのでしようか？

滋賀県からの開拓移民団員の写真の中から、同じ村出身で苗村という人を選びました。その後、苗村と文通が重なるにつれて満州の様子を知るようになり、ますます夢と希望がふくらんでいきました。わたしは、滋賀県で初めての「満州花嫁」

でしたので、村をあげて日の丸の旗をうちふり、村長さん以下総出で見送ってくださいました。

「これで日本とも当分お別れか」と思うと、今まで張りつめていた気持ちがついゆるんでしまい、涙が流れて止まりませんでした。

二 開拓団での生活

いよいよ夢にまで見た満州へ出発です。

船で日本海を渡り、南満州鉄道で国境を越えて数日間、どこまでも続く満州平野の広大な景色をながめながらの旅でした。

目的地の龍爪開拓団は、近畿地方や中国地方の各県の出身者で構成されていて、それぞれの県ごとに村をつくっていました。わたしは滋賀村の一員となり、一つの家族のように仲良く楽しく過ごしていました。

満州の春の訪れはおそいのですが、暖かくなると、凍った土に閉じこめられて

いた植物も、家畜たちも春の息吹の中でうれしそうに春の歌をうたうのです。

農業も農業機械を使つての作業にはまだ程遠かつたのです。

でも、よく耕された広い土地で面白いほど収穫がありました。

春はアヤメ、シヤクヤク、スズラン、ユリなどが咲き乱れ、秋には山にきのこが顔を出し、平和でおだやかな時の流れの中で、わたしたちに新しい命が誕生しました。

しかし、それは東の間の幸せだったのです。

昭和十六年の暮れに太平洋戦争が勃発しました。それでも、わたしたちの生活はいつものおだやかな生活でした。

ところが、昭和十八年ごろから戦争はますます激しくなり、新聞やラジオで内地（日本）の様子が伝えられるたびに、故郷の家族のことが心配でなりませんでした。

三 悲劇の始まり

その日は、突然やってきました。

昭和二十年八月九日の朝。

何の予告もなく、ソ連軍が戦車を先頭にしておそつてきたのです。

毎日ラジオのニュースで戦争の様子は聞いてはいましたが、満州は大丈夫だと

みんな思っていました。ソ連との間には「日ソ中立条約」が結ばれていたからです。

突然の侵略に、わたしたちはあわてて滋賀村を去らなくてはならなくなりました。

滋賀村には十二軒の家族がいましたが、男性は九十パーセントが召集されて、

ほとんどいません。残ったのは老人と女、子供だけです。

八月十一日。わたしたちは、身の回りのものを大急ぎで馬車に積み、住みなれた

滋賀村をあとにしました。家族と同じように働いてくれた中国の人たちも、泣きな

がら別れをおしんでくれました。いちばんかわいそうだったのは、家で飼っていた

牛、豚、鶏や羊たちでした。

※日ソ中立条約……ソ連と日本はおたがいに侵略しないという約束

手塩にかけて育ててきたわたしたちの分身です。何も知らずに、羊が馬車の後ろからちよこちよこことついてきたのです。かわいそうで、涙が止めどなく流れました。しばらく行くと、ソ連軍の飛行機から機銃掃射を受けました。

ビュービューと不気味な音が耳をかすめました。わたしたちは、急いで麦畑の中にかくれ、身を小さくしてふるえていました。みんなの顔色は真っ青です。子供たちはあまりのおそろしさに泣き声も出せなかつたようです。中には氣を失っている子供もいました。

こんな所には駄目だとみんなではげまし合つて、団本部に向かつて全力でかけました。

島根村に着いたとたん、

「おおい！ おおい！ 後ろからソ連軍の戦車が五十台くらい来ているぞ！ みんな早く身をかくせ」と、どこからか、だれかがさげんでいます。

わたしたちは再び恐怖心が体中に走り、がたがたふるえながら、馬車も荷物もそのままにして子供の手を引っぱって近くの草むらに飛びこみました。

しかし、人の背の高さほどもある草むらの中では、どこにだれがいるのかまったく分かりません。泣きさけぶ子供の声の方に向かって呼び合う声がこだまして、不気味でした。

方向の分からない草むらを走っては転び、起き上がっては走り続けていました。すぐ後ろから戦車が追いかけてくるような錯覚におそわれました。しばらく無我夢中で逃げまどっているうちに急に静かになってきたので、いくらか落ち着きを取りもどし、辺りを見回したら、わたしと子供三人、滋賀村の看護婦さんだった人と、あと女性一人が一団となっているのが分かりました。みんな着の身着のままでした。これからのくらしい歩けばいいのかも分かりません。また、食べ物もありません。「いつそのこと死んでしまおうか？」

※機銃掃射……機関銃で、敵をなぎたおすように射撃すること

と、だれからともなく口に出て、看護婦さんが、

「わたし、薬を持っている」

と言って、毒薬を取り出しました。みんな、だまってその薬袋くすりぶくろを手に取り、飲むうとしました。

その時ふと、わたしは思いました。

（こんな異国の地いこくで、だれにも看取みとられずに山の中で命を落としていいのだろうか？ たとえ、草の根、木の皮をしゃぶつても、生きられるだけ生きぬいてみよう。体力が続くかぎり南に向かつて進んでみよう。そうすれば命の綱つなが見いだせるかもしれない）と、心の底から生きようとする力がわいてきました。

わたしは思い切つて、みんなに自分の気持ちを伝えました。

みんな我われに返り、同意してくれました。

気持ちをしつかり持ったら、不思議と力がわいてきました。

二歳の健、四歳の敏子を背中にくくりつけ、六歳の満雄の手を引いて、山道を歩きたしたのです。

やっとの思いで団本部に着きました。しかし、すでに出発したあとでした。わたしたちは休むまもなく、あとを追いかけてきました。でも団本部に追いつくことはできません。険しい山道を、平均して一日に五、六里歩きました。

食べ物もなく、おなか为空いて、毒ではないかと思われような真つ赤な木の実も食べました。幸い毒ではなく安心しました。

途中、日本兵の一団に合流し、その人たちについて行くことになりました。

夜は野宿をしました。蚊がいっぱいいて、ねむれる状態ではありません。声を出すこともできず、蚊に食われるままに一夜を過ごしました。

「このままでは、いつかソ連兵に見つかって殺されてしまう」と不安がおそい、休むこともそこそこにして、つかれた体にむち打って歩き始めました。

人間生きるためにはどんなことでもするものです。

畑に入つてスイカやキュウリを盗んで食べました。まず子供に食べさせ、わたしは食べながら歩きました。

夜が明けて、日が昇りだしたところです。

「明日中に横道河子を渡らないと、橋がこわされるだろう。みんな頑張れ！ これからかけ足だ！ 二十里はあるぞ！」

隊長らしい人が、さけんでいます。

わたしはもう、くたくたです。泣くにも泣けない気持ちです。でも何としても一団について行かなければ、死を待つのみです。

「何としてもついて行くぞ！」

と、覚悟を決めて、いちばん後ろから走りだしました。

どうにか足は動いていたのですが、苦しき、つらさはたとえようもありません。

まだ六歳の満雄は、もう走る力も泣く力もなく、ただわたしに引きずられるまま

でした。

途中たおれてしまうお年寄りや子供たちもいました。しかしわたしたちは、助け起こしていっしょに走ることはできませんでした。泣く泣く置き去りにして走りましました。

横道河子おうどうがしに近くなると、明かりが二つ三つ見えてきました。どうやら集落のようです。こんなに、明かりがなつかしく温かく感じたことはありません。

でも、その反面、どんなことになるか不安でした。しばらくして、集落から二、三人の人たちが出てきました。そして、わたしたちにキユウリを二本と饅頭まんじゅうを食べさせてくれたのです。本当に神様に助けられたような気持ちでした。ありがたくてそれまでの苦しみがうれし涙なみだになって、ぼろぼろとこぼれました。

「こんな所に日本人がうろうろしていたら、つかまって殺されちゃうよ。早く吉林きんりんの方に行きなさい」

と、集落の人から親切に言われましたが、わたしはもう逃避行とうひこうを続ける気力もなく

なっていました。でも、何としても生きて日本に帰りたいという気持ちをもふり立たせて、歩きつかれてばんばんにはれ上がっている足を持ち上げました。

すっかりつかれきっている満雄を、

「さあ、頑張って歩こうね。父ちゃんの所に行けるよ。頑張ろうね」とはげましました。「父ちゃんに会える」ということで、少しは満雄も元氣を取りもしました。

わたしたちはまた、歩き続けました。

途中、お年寄り四人が行きだおれになって死んでいました。

山の中では、子供が十人くらい、体を並べて殺されていました。

いっしょに歩いていた日本兵もだんだんと少なくなっていました。

わたしたちが子供を泣かすと兵隊は、

「子供なんか捨ててしまえ」

と、どなりました。

ああ、どうして可愛い我が子を捨てることができましょうか。

人は追いつめられると、思いやりも優しさもなくなってしまうのでしょうか。

四 生と死のはざままで

逆境さか境に立つと女は強いといわれていますが、本当にそう思いました。わたしは、これといったものは食べておらず、のどがかわくと水たまりの泥水どろみずを飲んで命をつなげてきました。

川を四つ渡わたらなくては危険地帯きけんを突破とっぱできません。

運命いたずらの悪戯いたずらでしょうか。第一の川は大雨で増水ぞうすいしていたので首までつかって渡りました。下の二人の子供は背中せなかにくくり付けて、満雄みつおはだきかかえるようにして必死わたで渡りました。

そのつらさや苦しきは、とても言葉で言い表すことはできません。

八月二十一日。

約二十二里、歩いたことになります。

やっと日本兵の集まっている所に着きました。

ほっとしていると、通りすがりの日本兵が、背中の健を見て、

「子供の様子がおかしいよ」

と、教えてくれました。

びっくりして健を下ろしてみると、健はもう死んでいました。

今まで夢中で歩き続けてきたわたしは、健の異常には気がつきませんでした。

胸がきゅつとつまつてきました。涙もかかっていたのか、そのとき涙は流れませんでした。

でした。お乳が一滴も出ないから、赤ん坊は死ぬよりほかなかつたんだと、そのとき

きはそんな考えしか浮かばず、心が混乱していたのかもしれない。

健の異変を教えてくださいました兵隊さんは、とても親切にしてくれて、スコップで穴を

掘って、健をそつと入れてくれました。

そして数人の兵隊さんたちは、健のためにお経を唱えてくれましたが、そのお経

を聞いているうちに悲しみがこみ上げてきて、初めて涙が流れました。

おそらくあの兵隊さんも健たけしのような子供こどもがいたのではないでしょうか？

今でも、あのときのご恩おんを忘わすれないでいます。

しかし、いつまでも悲しみにしずんでいられないのです。わたしはどんなにつらくても、今ここに生きている二人の我わが子こを守まもっていかなくてはならないのです。

幸い、男の人たちによつて草小屋くさぐらが造つくられて雨露あめつゆをしのぐことができました。

食べ物は畑からトウモロコシやアズキなどを盗ぬすんで食べました。いけないことと知りながら、子供こどもを守るために仕方がなかったのです。

夜明け、食べ物をとりに畑に入り、人に見つかりそうになって、近くの川に飛びこみました。冷たい川の中で一時間つかつていました。体は冷えきって感覚もなくなってきましたが、キュウリ数本をもつて子供こどもの所に帰ることができました。

また、ある日は食べ物を探さがしに別の畑に入り、トウモロコシを四、五本盗とり、こ

れで今日は生きのびられると思つたとき、男の人に見つかつてしまいました。

「今度こそ、殺される」とあきらめの気持ち先立っていました。残された子供たちのことを思い、必死になつて手を合わせて命ごいをしました。そして片言の中国語で、

「わたしには子供が二人います。食べ物がなく子供たちが死にそうです。悪いと知りながら盗んでしまいました。助けてください！ お願いします」

男は、わたしの持つていた時計と、わずかばかりの小銭を取り上げました。

「これで勘弁してやる。その代わりに子供をくれ！ すぐ連れてこい」

と言つたので、わたしは、

「はい」

と、返事をしてしまいました。

大急ぎで山の中にかくれました。

そして、山道を夢中で走り小屋までたどり着きましたが、そのとたん氣を失つて

しまいました。子供の泣き声で意識がもどり、子供にだきついて泣き伏してしまいました。

ソ連兵には持っているものを身ぐるみうばわれ、それでも必死で子供たちの命を守って生きてきました。

十月三日

④ 牡丹江に着きました。

みんなの顔は、急に明るくなりました。

「これで内地に帰れるぞ」

「子供たちにも会えるぞ」

「父ちゃん、母ちゃんにも会えるんだ」

「ここで死んでは駄目だぞ！」

と、兵隊さんにはげまされました。そして、子供たちにも、

「もうすぐ日本に帰れるよ、みんなが待っているよ」

と、声をかけてくれました。その優しい兵隊さんたちは、皮肉にもそのまま列車に乗せられて北上し、シベリアの方に連れていかれました。

わたしたちは、南下することになりました。

牡丹江から無蓋貨車に乗せられ、ぎつしりつめこまれて、こぼれ落ちそうでした。各駅で停車します。そのたびにソ連兵がおしかけてきて物をうばい、女の人をなぐったり、けつたりと暴力をふるいました。

一週間かかって新京（長春）^⑩。新京から奉天（瀋陽）^⑪に。それから、奉天の収容所^⑫に入りました。

収容所での食べ物^⑬は粟^⑭だけです。栄養失調のために、何人かの子供たちやお年寄りが死にました。それにこの収容所は学校の講堂^⑮でした。床は冷たいコンクリートです。そこに収容者は一列に並んで寝るのです。寒さをしのぐために、みんなはむしろのようなものを腰に巻きました。わたしも駅まで拾いに行きました。ソ

連兵の残飯を拾ってきて、子供たちに食べさせました。

腸チフスが流行して毎日百人くらい死んでいきました。栄養失調で抵抗力もな
いから、かかれば死ぬしかないのです。満州の冬は零下二十度と想像を絶する寒
さです。

毎日毎日、人が死にました。日本軍の捕虜が掘ったという四万人くらい入る穴に、
遺体を物のように投げ入れるのです。今日は自分の番かと思うぐらいで、何の感
傷もわいてこないのです。

忘れもしません。昭和二十年十一月十日。ついに敏子が栄養失調で、四歳の短い
生涯を終え、翌日の十一日に、六歳の満雄が凍死しました。

自分が食べなくても我が子にはと頑張ってきたのに、ほんとうに悲しいことでは
な

戦争とは、何とむごいものなのでしよう。

なぜ、何の罪つみもない子供こどもたちが死ななくてはいけないのでしようか！

この子たちの人生を返してください！

ひとり生き残ったわたしは、涙なみだもかれて、うつむいて日本に帰ってきました。

それからは、涙なみだを勇氣に変えて、身をちぎられるような悲しみを優やさしさにかえて、

しっかりと前を向いて生きてきました。

わたしたちのような苦しみを今の人たちに絶対ぜったいに経験けいけんさせてはなりません。

しかし、このような事実があったということ、それを乗り越こえて強く生きてきた

人々のおかげで今の平和があるのだということを忘わすれないでもらいたいと思います。

(原作 苗村富子「生き地獄じごくから戻もどった私わたし！